



書
評

口腔咽頭の臨床 第2版

編集 日本口腔・咽頭科学会

A4 頁224 2009年 定価15,750円(本体15,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00757-3] 医学書院刊

<書評者> 高坂知節 (東北文化学園大学・学長)

現時点で入手できる最高水準のテキスト

この度、医学書院から第2版が刊行された『口腔咽頭の臨床』を手にして直感的に思ったことは、B5判からA4判に紙面が拡大するのにあわせて、内容が『小結クラス』から『大関クラス』へとレベルアップしたということであった。

初版から10年を経過して、口腔咽頭科学を取り巻く社会的状況が大きく変化したことにも細心の注意を払いつつ、『いびきと睡眠時無呼吸症候群』、『摂食嚥下障害』、『構音障害』、『腫瘍』のテーマについて新しい章立てを行って十分に解説したことは、誠に的を射た編集方針であった。

本書は初版当時から、いわゆる教科書の殻を破り、カラー写真とイラストを随所に盛り込んで読者の理解を助ける方針をとっていたが、この方針が見事に踏襲されるとともに、写真印刷技術の進歩により、きわめて精緻なカラー写真が多数掲載されている。特に口腔咽頭粘膜の病態は、光が十分届かない狭くて深い領域のものであり、撮影技術にも高度なテクニックが求められるが、それらの困難を見事に克服している点が第

2版の特徴の1つであろう。

さらに、分担執筆の教科書にもかかわらず、執筆内容に統一感が維持されている点が第2の特徴として挙げられる。全編を通じて、疾患の定義、症状と所見、診断、鑑別診断、治療、予後と一貫した順序立てをもって記載されている。

また、分担執筆者の範囲は、医育機関の教授や准教授・講師に限定せず、一般病院やプライベートオフィスの第一線で臨床に当たっている専門医が14名も参加しているのが第3の特徴であろう。口腔咽頭疾患のかかりのものが大学病院以外の外来で診療されている現状を把握した見事な人選と考える。

以上述べてきたように、第2版は初版の良き伝統を引き継ぐとともに、時代の変遷に合わせて追加すべきところはしっかりと補われているために、稀にみる完成度を備えた教科書として仕上がっている。もちろん、向後10年を見据えて更なる進化が期待できるが、現時点では入手できる最高水準のテキストといえよう。かつて初版当時の執筆を担当したひとりとして同慶の至りである。